

第4章

支える

支援の部

町の中から、外から、傷ついたこの町を支えようと駆けつけた人たちがいる。

内陸で津波被害のなかった豊間根・荒川地区の人々は沿岸の惨状を知り、即座に行動した。「炊き出しに熱い思いを」では、大津波の日、夜通しおにぎりをこしらえ、その後も1カ月間にわたって避難所に食事を届け続けた同地区の女性たちの動きを追う。

「応援職員の働き」。震災後、全国の自治体などから山田町役場に派遣された応援職員の活躍を取り上げ、当時の体験を派遣元の防災対策などにどう生かしているのかを紹介する。

炊き出しに熱い思いを 豊間根・荒川の女性たち



津波の直後、すばやく炊き出しの手配を始めた斎藤順子さん



「日ごろの訓練のお陰でスムーズに炊き出しができた」と語る芳賀恵美子さん

豊間根・荒川地区



あの日、豊間根地区で水道設備の工務店を経営する斎藤順子さん(61)は事務所にいて激しい揺れに襲われた。電気が落ち、自動車のテレビをつけると、宮古漁港に押し寄せる津波が映し出された。山田地区から戻った従業員が震える声で言った。「町も、わが家も流されました」。自主防災組織「荒川婦人防火クラブ」の副会長だった斎藤さんは、消防団員に乞われて町役場豊間根支所に向向いた。

支所前の広場は消防団のポンプ車などが集まり、騒然としていた。「絶対に炊き出しが必要になる」と強く感じたが、混乱の中、具体的な指示や要請がないまま支所を後にし、事務所に戻った。携帯電話は不通で、荒川地区の仲間と連絡する手段がない。事務所の前を通った車を止め、拠点の荒川農業構造改善センターで炊き出しの準備をしてほしいと伝言。工務店の男性従業員には、発電機や灯光器、石油ストーブをセンターに運び込むよう指示した。

そのころ、同クラブのもう1人の副会長(当時)、芳賀恵美子さん(61)も慌ただしく動き回っていた。荒川地区の各行政区長に炊き出し要員を募るよう要請。センターには女性ら約40人が集まり、米や梅干し、漬物などを持ち寄った。地区の全戸が加入する同クラブで、炊き出しの訓練は何度も経験していた。炊きあがったご飯に梅干しを入れてにぎり、手際よくのりで巻いていく。

芳賀さんは「ただ無我夢中でした。みんなが自主的でスムーズな動きができたのは、普段の訓練のたまものかも」と回想する。停電の暗がりの中、5升炊きのガス釜5台をフル稼働させ、その日は午前1時までに約1500食分・3千個のおにぎりを作り上げた。その動きはまるで食品工場の生産ラインのようだった。

当時同クラブ会長で町議会議員の吉川淑子さん(73)は、町議会最終日で町役場において震災に遭い、中央公民館に避難していた。轟音と共に町を破壊する大津波と、爆発音を上げながら燃え盛る火災を目の

町の中心部が津波の後の火災で紅蓮の炎に包まれていた。北に約7キロ離れ、内陸で被災しなかった農村地帯の豊間根・荒川地区では、発電機でもした明かりを頼りに、女性たちが懸命に炊き出しのおにぎりをこしらえていた。「とにかく、やらなきゃ」。町の窮状を察した女性グループや自治会の反動的で自発的な救援活動は、農繁期を目前にした4月まで続き、避難者の元に食料や物資を繰り返し届けた。「結の精神があったからこそできた」。後方支援に徹した人々は当時をこう振り返り、この地域に古くから根付く絆が活動を支えたと言語る。

炊き出し必要と確信

食品工場のように



荒川農業構造改善センターで避難所に届けるおにぎりを作る女性たち(平成23年3月26日午後1時23分撮影)。「食品工場の生産ラインのような」動きだった

避難所におにぎり届け 「絆」が支えた後方支援



吉川淑子さんは避難者の自立を促そうと、炊き出しの手伝いを頼んだ



新田の農事集会所で活動した尾形マサ子さん。在宅避難者にも支援の手を差し伸べた



行政との連携で課題も感じたという根子光子さん

混乱もあったが、近隣の八千代、勝山の両集落の自治会が協力して食事を提供し続けた。当初、炊き出しの各現場で作ったおにぎりは、温か

詰めかけた。同クラブが夜通し作ったおにぎりは早速、役立てられることになった。吉川さんと斎藤さんは津波の翌日から各避難所を訪ねて何が必要か聞いて回り、約230あった荒川のほぼ全世帯からタオルや歯ブラシといった日用品、衣類、下着などあらゆる物資を集めて届けた。

9カ所で炊き出し

炊き出しの動きは豊間根地区でも同時発生的に起き、荒川と合わせて9カ所が現場になった。

国道45号沿いの新田集落の農事集会所には尾形マサ子さん(70)ら女性たちが米や梅干しを手に集まり、炊き出しを準備。しかし、停電で電気釜が使えない。ガス釜は集会所に小さなものが1台しかなく、各家庭か

ら持ち寄ったり、家のガス釜で炊いたご飯を提供してもらったりした。「土鍋とか、炊けるものがあれば、何でも使った」と尾形さん。その日は一睡もせず、朝の5時まで繰り返し炊飯した。

山田地区や大沢地区からずぶぬれになりながら逃げてきた人たち二十数人を受け入れ、すぐそばの豊間根小学校に避難した約80人にも、温かいおにぎりやみそ汁を配った。そのうち白米が底をつくと、自治会の全面的な協力を得て発電機で精米機を動かす。玄米を精白した。

親戚や友人宅など避難所以外の場所に身を寄せた人々、いわゆる「在宅避難者」に、食料や支援物資が十分行きわたらなかつたことをうかがわせる出来事もあった。山田地区に

家があるという男性が集会所に来て、こう頼み込んだ。「助けてくれ。おらいさ(わが家に)、いっぱい泊まる人が来たつたども、食べ物がないがござんすが、下さんせ」。子供用の下着が欲しいと訪ねてきた若い人もいたという。

温かいまま届けたい

根子光子さん(63)は豊間根支所に隣接する豊間根生活改善センターで活動した。津波直後、町の被災状況が分からない中、各家庭や近所の商店で米や塩を調達。それだけでは不足だったが、1回目の炊飯が終わるところには豊間根地区東部の島田や長内から米が集まってきた。同センターは避難所になり、パニック状態の人が出たり、いさかひが起きたりと

衛生考えラップで包む

豊間根地区で新興の住宅地・桜野にある集会所「農村婦人の家」で指揮を執ったのは三ヶ尻ミツ子さん(66)だ。女性グループ「石峠ミセスクラブ」のメンバーが中心となり、地域に呼び掛けて米やのり、梅干しなどを集めた。毎日30人ほどが炊き出しに従事。手を洗えずにいる避難者の衛生状態を考え、おにぎりは一つずつ食品用フィルムラップで包んだ。

「婦人の家」周辺は宮古警察署による捜索活動の拠点になり、他県からの応援も含め、警察車両が続々と集まってきた。隣接する「健康増進センター」体育館は遺体安置所に指定された。

女性らは、寒空の下で捜索や検視



三ヶ尻ミツ子さんは「農村婦人の家」で遺体捜索の警察官らの接遇もした



食生活改善推進委員の佐々木マサ子さんは日々の食事の工夫に努めた

の激務に従事し、車両やテントで寝泊まりする警察官たちを気遣った。休憩スペースを設けて警察支給のおにぎりを温めたり、熱いお茶を用意したりするなどの接遇に努めた。三ヶ尻さんは、遺体と対面した直後の人たちの「泣くでもなく、何が起ったか分からないというような」自失の表情が今も脳裏に焼き付いているという。

寺や学校も米提供

水田地帯の上豊間根に震災の2年前に完成した上豊間根自治交流会館は、館内に手すりなどを備え、期せずして福祉避難所のような役割を果たした。津波の日に町役場に隣接する中央コミュニティセンターなどに逃げていた介護が必要な高齢者と家

族ら45人が、火災に迫られて身を寄せ、畳敷きの部屋は満杯になった。佐々木マサ子さん(65)ら地域の女性らは、震災2日目から同会館で炊き出しを始め、高齢避難者のためにおかゆなどを用意するとともに、災対本部豊間根支部の要請に応じておにぎりを作った。また、近くの民家を借りて避難生活を送る、大沢で被災したグループホームの入所者とスタッフら22人にも食事を届けた。曹洞宗宝珠院や豊間根小学校が備蓄米や収穫米を提供してくれ、旧県立山田病院から譲り受けた5升炊きの電気釜2台を発電機で動かした。佐々木さんは食生活改善推進員としての自覚が強く、支援された大量のサンマや養殖イワナでみりん干しを作るなどの工夫もした。

1人の力じゃない

吉川さんは大所帯の避難所などに食料や物資を届けるたびに、人々が身を縮ませ、元気のないのが気になった。「何もしないで待っている人が多

い。体を動かせば、前向きになって自立できるのでは」。そう考え、健康そうな人たちに炊き出しを手伝ってくれるよう呼び掛けた。読みはほぼ当たり、4月初めまでには各避難所で自炊が行われるようになった。

津波から1カ月後の4月12日。農家で田植えの準備があることや、各避難所で自主運営の流れができていく事情などを災対本部が酌み、豊間根・荒川地区の炊き出し活動は終了した。

女性たちは「みんなが協力した。1人の力じゃない」(吉川さん)、「人が集まってやることはすごい。まさに力」(佐々木さん)と語り、その背景には「昔からの結の精神があった」(斎藤さん)。芳賀さんは「生きるための食に日々関わる女性の力が大きかった」と振り返る。尾形さんと根子さん、三ヶ尻さんも口をそろえて言う。「何も特別なことじゃない。やらなきゃならないって思っただけ」

(平成28年6月取材)

応援職員の働き

全国自治体から

駆け付け

町の立て直しに尽力

震災発生から間もないころの、緊迫した空気が漂う町役場。地元正規職員は、自ら被災しながらも過酷な対応や業務を強いられていた。そんな中、彼らを助け、町の立て直しに大きく貢献したのが、全国の自治体などから派遣された応援職員たちだ。震災後の1年間で延べ27人が長期派遣され、インフラの復旧・整備や仮設住宅の建設などで力をふるった。応援職員の当時の活躍と今の姿を追う。

自治体派遣や任期付雇用

■**応援職員** 東日本大震災の影響による被災自治体の業務の増大や人手不足に対応し、総務省や各自治体が取り組む人的支援の要員。地方自治法に基づく全国の自治体からの派遣職員、被災自治体が直接雇用する任期付職員などに分けられる。派遣職員の場合、被災自治体が総務省を通して全国市長会・全国町村会や、提携関係にある自治体に協力要請して人材を確保する。派遣期間は3カ月～1年ほどで、派遣元によって異なる。任期付職員の任期は最長5年。平成28(2016)年4月1日現在で被災3県に3539人の応援職員がおり、山田町役場では65人が勤務している。



震災直後と1年後からの計2年間、防災集団移転促進事業などに携わった田口俊彦さん



田口さんが支援で訪れた保育園から寄せられた感謝のメッセージ

えたり、仙北市から官民のボランティアを送り込んだりした。現地連絡所が閉じられた後も市民らによる交流は続き、震災の年に山田町だけでも約20回、名物のきりたんぼの炊き出しや同市が本拠地の「劇団わらび座」の慰問公演などが行われた。避難所などで、柔道で鍛えた大きな体で笑顔を絶やさず、子どもたちにも気さくに声を掛ける田口さん

は、被災町民の心を癒やした。仙北市に戻ってから届いた感謝の手紙の数々は田口さんの宝物だ。「皆さんにストレスがたまっているのは伝わってききました。家を流された上に、身内を亡くした方も多し。相手を傷つけないように、精神的に落ち着いていただけるような言動、対応に尽くそうと心掛けました」。こうした官民挙げての支援活動は翌平成24(2012)年1月、山田町と仙北市の「災害時における相互応援に関する協定」として結実する。同協定はお互いの災害時に食料や

秋田県仙北市 田口俊彦さん

連絡所設け職員常駐 支援実績が災害協定に

「山田町が大変なことになっていてと聞いた。私たちに何かできませんか」。町から内陸に100キロ余り離れた秋田県仙北市役所田沢湖庁舎。震災当時建設課に勤務していた田口俊彦さん(41)＝現・総務部総合防災課総合防災係長＝は、民間団体のメンバーに相談を持ち掛けられ、心が動いた。

仙北市は日本海から太平洋側に向かって地続きの秋田・岩手両県の7市町村と横軸の災害協定を結んでいる。同協定で東端の宮古市に隣り合う山田町の惨状は決して対岸の火事ではなかった。門脇光浩市長の指示もあり、ボランティア10人と共に初めて車で山田町に入ったのは3月24日のことだ。

国道45号を南下して大沢地区に差し掛かると、がれきの山が目飛び込んできた。「あれより先は正直、足が止まりました。想像を絶する光

景でした」。一行はその日のうちに大沢小など数カ所の避難所でカレーライスの炊き出しを行う。田口さんは役場4階にあった災害対策本部に足を運び、関係者と携帯電話の番号を交換した。その時、「自分たちもいつ大災害に見舞われるか分からない。同じ行政の仕事をしている者として、できることを精いっぱいしなければならぬ」と肝に銘じたという。

震災から2日後に支援本部を立ち上げた仙北市は、田口さんらの報告を受け、山田町と大槌町、宮古市の支援拠点となる現地連絡所の開設を決定。山田町船越の民宿の一室を借りし、4月10日からほぼ2カ月間、交代で職員2人を常駐させた。

延べ30人が派遣され、各避難所を訪ねてどんな物資や支援が必要かを聞き取り調査。町の災害対策本部や社会福祉協議会に避難者の要望を伝

水、物資、被災者の受け入れ施設、職員派遣などを融通し合うことをうたい、両者の協力体制をより一層堅固にした。

田口さんはさらに24年4月から1年9カ月間、町役場建設課に長期派遣され、田の浜地区の高台道路建設や防災集団移転促進事業に携わることになる。26年1月に仙北市役所に復職すると総務部総合防災課に配属。秋田駒ヶ岳や八幡平といった山

地に囲まれた同市で、豪雪災害や土砂災害、山岳遭難などに備える。

今後、山田町での経験をどう生かすのか。「避難所での職員配置など全てが参考になったし、災害協定も活用したい。山田町に行かなければ、ともすれば平和ぼけしていた。被災地を見てきた職員は、何らかの覚悟はできたと思うんです」

和歌山市 瀬藤和秀さん

水道の異常くまなく調査 派遣2度、専門家の目で

あの日、地震の揺れは震源から南西に約800キロ離れた和歌山市にも伝わった。同市はわずかに震度1を観測したが、水道局工務部勤務で市役所庁舎にいた瀬藤和秀さん(43)には、「酔っているのかな」と錯覚するくらい、長く、大きな揺れに感じられた。テレビ画面は時々刻々と、あまりにも甚大な津波被害のありさまを残酷に映し出していく。「すぐ

にでも行かなければ」。20代前半で経験した阪神・淡路大震災で「なすすべもなく」涙を飲んだ瀬藤さんが、春の大型連休にボランティアで陸前高田市の被災地に駆け付けたのは自然な成り行きだった。

現地では壊れた家の片づけや市の広報誌の配布などに従事。1週間の活動を終え、和歌山市役所に戻ると、上司が呼び掛けた。「派遣職員とし



瀬藤和秀さんは志願して2度目の派遣期間を過ごしている



大沢地区で被災した青色の水管橋。瀬藤さんらは町内の水道設備をくまなく点検した

て山田町に行く者はいないか」。ためらいは全くなかった。7〜9月の3カ月間の赴任が決まったのは、瀬藤さんを含め4人。瀬藤さんは同じく志願した水道局の上司と共に上下水道課に配属され、地中に埋設された水道管の「仕切弁」と呼ばれるバルブなど関係設備の被災調査・点検に当たった。

り、供給したりする役目があり、公道などの地下1メートルほどの深さにあるボックスに格納されている。調査ではボックスの地面のふたを一つ一つ開け、T型レンチ状の大きな工具でバルブが正常に開け閉めできるかどうか確認した。町内の仕切弁は数百基ある。くまなく車で回りが、大きな被害がないことを確かめた。河川に架けられた水道管の橋「水管橋」の多くは津波の影響で破損していた。

近い将来、東海地震の発生が警戒される静岡市からは、震災の年の7〜12月に3人の市役所職員がそろって派遣された。都市計画や建築、土木のエキスパートたち。いずれも建

設課に配属され、混乱期に復旧事業の基礎を固めた。
松南克彦さん(49) 〓 都市局都市計画部 〓 浅場俊之さん(48) 〓 企画局公共資産経営課、榊原勝さん(44) 〓

建設局道路部(いずれも現所属)。3人は市の公用車に同乗し、釜石経由で町に入った。車窓から見えたのは、津波が直撃して骨組みだけになった建物や、むき出しのコンクリートの基礎部分。「僕らにいったい何ができるんだろう」。榊原さんは荒廃した町の様子にハンドルを持つ手が震え、涙を禁じ得なかった。

定の戸数では足りず、新たに建設用地を探さざるを得なくなった。民有地を借り上げるため、昼夜を分かたず、正規職員と共に地権者を訪ねて回った。
家を失った避難者の多くが不安に駆られていた時期。建設課には入居に関する問い合わせの電話がひっきりなしにかかってくる。対応に追われた。8月末までに43カ所1940



復旧初期のインフラ整備などに関わった(右から)松南克彦さん、浅場俊之さん、榊原勝さん

戸が完成。その後も入居者の要望に応え、玄関に風除室やひさしを設けたり、駐車場を舗装したりするなどの追加工事で入居者との調整を行った。

3人はそれぞれの分野、現場で山田町での経験を血肉としている。松南さんは被災者から「町で起きたことを事実として静岡に持ち帰ってほしい」と課題を託された。派遣の翌24年には、無秩序な土地利用や建築計画が災害復興の妨げになるとの教訓から、市街地の建築を規制する条例の制定にこぎつけた。浅場さんは、山田から戻ると大規模災害時に必要とされる1万棟以上の仮設住宅の想定配置計画作成に取り組んだ。榊原さんは、海岸付近で建設中の高架道路と津波避難タワーを接続して避難の便を図ろうとしている。

の歩幅で校庭の広さを測った。工事が完了したのは町を去る時分の12月。学校を挙げて、工事関係者に感謝する会を開いてくれた。当初感じていた児童や教員らとの「心の壁」はすっかり取り払われていた。施工した業者の人は別れ際にこう言った。「もし東海地震が起きたら、俺たちが真っ先に重機を持って駆け付けてやるよ」

だとして、こう話す。「山田での学びを基にコミュニケーションができたので、非常時にはいろいろなケースを予想して行動したい。静岡もある程度の遡上高の津波が来るし、東北と違って到達時間も短い。津波避難タワーなどハード面の整備とともに、職員が常に問題意識や危機意識を持ち、政策の先手を打っていくことが大切です」
浅場さんも継続的な職員派遣の有

町の力になれたのか」と自問自答を繰り返し、何となく心を残したまま町を離れた。

理職らに強く慰留されて断念。さらに1年待ち、震災から5年目の復興事業に関わりたいたいと、再び手を挙げて山田町に赴任した。

震災から2年半余り経った平成25(2013)年秋。原発事故で被災した福島県南相馬市で草刈り作業などのボランティアをした後、同じ足で山田町を再訪した。荒涼とした景色のあちこちに仮設店舗の明かりがともっていたが、復興は進んでいないと感じた。「そうだ、俺はずっとここに来たかったんだ」。体は遠く離れていても、心はいつもこの町に向いていた。翌26年、派遣職員の募集に応じようとしたものの、当時の管

現在、復興推進課で防災集団移転促進事業の計画変更などの事務仕事に携わる。瀬藤さんは「震災後間もないころは町民の皆さんも大きく沈んでいましたが、今は前に向かって歩いていると感じます。町づくりに伴って水道工事が増えてくるので、今後は専門の水道の分野でも貢献したい」と表情を引き締める。

静岡市 松南克彦さん 浅場俊之さん 榊原勝さん 混乱期に復旧担う 山田の学び、防災に反映

効性に触れ、「私が派遣された当時と今とでは、行政マンとして復興にどう取り組んでいくのかの違いがあるが、いずれも貴重な体験。引き続き、派遣の成果を市の復興防災計画に反映させていきたい」。榊原さん

静岡県三島市 鈴木啓司さん

仮設入居の実務こなす 教訓共有し災害対応を

静岡県三島市の政策企画課で総合計画策定に関係した鈴木啓司さん(48)は震災の年の7〜10月、志願して山田町に赴任した。建設課で主に仮設住宅の入居手続きの事務を担当。入居者の募集から抽選、家電など備品の手配、鍵の引き渡しまで一連の実務をこなした。

中には、立地のよさなどで人気のある住宅の抽選に何度も外れて怒り出す人もいたが、鈴木さんが遠来の派遣職員だと分かると矛を収めてくれた。お年寄りの聞き取りにくい山田弁にもすぐに慣れ、何よりも海山の美しさや、食わず嫌いだった特産

は「道路や河川の整備で災害を防ぐうとしても自ずと限界がある。普段の備えや避難訓練がいかに大切か身をもって感じた」という。

のカキのうまさ感動した。

被災して間もない町役場に勤務して実感したことがある。「震災直後に役所や役場にできることはわずかで、一部の情報発信ぐらいだ。避難したり、耐震補強などをしたりするのも結局は個人。自らの命は自らで守らねばならないし、災害時にできることは平常時の一部に過ぎない」

鈴木さんは、非常時の備蓄や防災に関する情報をいかに関心の薄い住民に浸透させるかが課題だといひ、日ごろの啓発活動の大切さを強調する。三島市に戻ると、翌平成24年4月から企画戦略部危機管理課に配属



正規職員から多くの教訓を学んだという鈴木啓司さん

され、防災計画の見直しや避難マニュアルの策定に取り組みほか、役所内や地域で避難訓練を促進。

特に災害関連死の多発を想定した避難所運営の訓練を熱心に呼び掛け、平成27年度は市内23の公立小中高で構成する避難所のうち当初実績の3倍増に当たる18カ所で実施させた。避難所の学校と自治会、行政の3者が意見交換する会議を順番に開

き、テコ入れた成果といえる。防災に関する市民対象の「出前講座」も、山田町に派遣されたもう1人の職員と手分けして年間50回は開く。

山田町を去る際、各課の担当者から震災時の対応を学んだことが大きな糧になったという。

「義援金収受や遺体検案の担当、本部機能に関することなど、何がどう大変だったのかがそれぞれ部署で聞けてよかった。どの現場にも多くの混乱があり、マニュアル化したものを職員同士で共有しないと災害対応は難しいという教訓を得ることができました」

取材時期 平成28年2月(田口さん・松南さん・浅場さん・榊原さん・鈴木さん)、同3月(瀬藤さん)

興す

復興の部

がれきに埋もれ、焼野原になったこの町を、心の側面から興す。

祭りや郷土芸能が盛んな山田町で、毎年9月の「山田祭り」が震災を経て傷ついた町民の心をどれだけ癒やしているか知れない。「祭りと心の復興」では、震災の年も途切れずに行われてきた山田祭りに、幾多の困難を跳ね返して参加する芸能関係者や神輿の担ぎ手の心情に触れる。

被災地や戦乱の国など荒廃した巷に捧げられた歌「新しい町」。「山田町と『新しい町』」は、この楽曲に携わる音楽家たちと町民との心の交流をたどる。

山田町織笠出身のミュージシャン佐々木龍大さんは大津波で実家が流され、喪失感にさいなまれた。「ふるさとを恋うる歌」では、故郷の情景を描いた自作曲を歌い続ける佐々木さんの願いをつづる。

祭りと心の復興

震災の年「山田祭り」敢行

郷土芸能と二つの神輿 悲しみ抱え…でも前向きに

山田は祭りと郷土芸能が盛んな町だ。祭りの日が近づけば、お囃子の音が風に乗り、人々の心は浮き立つ。震災の年の9月、国中に自粛ムードが漂う中、町で最大規模の祭典「山田祭り」は敢行された。町の鎮守・山田八幡宮と大杉神社の「復興祈願例大祭」として行い、大きく被災した四つの芸能団体も楽器や道具を直し、衣装を繕って例年通り参加。平成26（2014）年には、大破した大杉神社の神輿が修復を終え、震災を挟んで4年ぶりに山田八幡宮の神輿とそるい踏みした。祭りを支える芸能団体と神輿会の代表らは、肉親や仲間を失った悲しみを抱え、震災の影響による後継者不足に悩みながらも、「祭りでみんなを笑顔にしたい」と前を向く。

山田人は祭りで帰郷

「盆暮れに戻らなくても、祭りになればどこにいても集まってくる。誰彼なくこう口にするほど、山田の人には無類の祭り好きが多い。海上の安全と大漁を願う漁師町の風土や気質の賜物だろう。山田祭りに熱心に携わる人たちの心の暦は、いつも祭りの終わった翌日が新しい年の始まりだ。山田八幡宮と大杉神社の宮司を兼務する佐藤明德さん（54）は「祭り太鼓の音は、母親の胎内で聞いた心音と同じ。日本人のDNAに組み込まれている」と言う。

山田祭りは毎年9月中旬の2日間にわたっており、初日に山田八幡宮が、2日目に大杉神社がそれぞれ例大祭を行う。「ワッセ、ワッセ」の掛け声と共に暴れ神輿が町内を疾走、その前後で郷土芸能が行列をなして演技する。八幡宮の神輿に八幡大神楽と八幡鹿舞、境田虎舞が、大杉神社の神輿には山田大神楽と関口剣舞が付いて回り、さらに双方の列に愛宕青年会八木節と、関口神社に伝わる不動尊神楽が加わる。震災の

津波や火災で、大杉神社の神輿がつぶれ、山田大神楽と関口剣舞、不動尊神楽を除く四つの芸能団体が拠点を失った。

火災免れた八幡宮

あの日、佐藤宮司はJR山田線陸中山田駅そばのガソリンスタンドで給油しようとした瞬間に激しい揺れに見舞われた。そのまま車で山田八幡宮に急行する道すがら、余震のせいで電信柱は大きくしなり、アスファルトの路面は波打った。八幡宮の社殿や鳥居に異状はなかったが、境内に亀裂が入っていた。海沿いの北浜町にある大杉神社に向かう途中、「嫌な予感がして」進路を変え、関谷地区の自宅へ。妻（53）と避難した家用車のテレビは津波が大船渡を襲ったと速報した。

夜半、町の中心部は津波が原因の火災で燃え盛る炎に包まれていた。「宮司さん、神社の山に火が着きそうだ」。八幡宮の職員があわてて迎えに来た。佐藤宮司は本殿の奥深くに奉安してある白布に包まれたご神体を抱き、内陸に3キロ離れた本務

社の関口神社に丁重に運び入れた。その後、風向きが変わり、八幡宮への延焼は免れた。

大杉神社の神輿は大破

大杉神社の境内にようやく足を踏み入れたのは津波から3日目のことだ。岸壁伝いにがれきを越えながら行くと、社務所は跡形もなく、老朽

化したコンクリート造りの神輿堂は流れてきた家屋が激突したらしく、ぐしゃりと押しつぶされていた。お堂の裂け目からは、大破した神輿の金色の装飾物がかすかに日光を反射して鈍い光を放つのが見えた。

佐藤宮司によると、この神輿は戦中に旧満州（中国東北部）の神社に奉安するために京都で造営された。海を渡らないまま終戦を迎え、昭和23（1948）年、空襲で全焼した大杉神社の神輿の代わりに祖父の先々代宮司が製造業者から買い取ったという。「贅を凝らした作りで金具の



社務所や神輿堂が津波で大破した大杉神社（平成23年3月18日午後5時17分撮影）



自粛ムードの中、「被災者に楽しんでほしい」と祭りを行なった佐藤明德宮司



被災後に修復され、4年ぶりに復活した大杉神社神輿が海に入る「お塩垢離」（平成26年9月15日撮影）



太鼓や笛の音、独特の踊りが混然一体となった八幡鹿舞（平成23年9月18日撮影）



八幡鹿舞保存会長の伊藤哲生さんは伝統芸能の後継者不足を心配する

6月に山田祭りへの出演を決めてから復旧は急ピッチで進んだ。家を失った会員たちは避難所から無事だった会員宅に集い、和紙を張り合わせて虎頭をこしらえ、山車を組み立

アにしてSDメモリーカードに落とす。今使用している男性の歌声は約20年前の録音で、自宅が無事だった仲間の家にあったCDの音像をクリアにしてSDメモリーカードに落とす。

草の三社祭など各地で祭りが自粛されても、7月の関口神社の例大祭はやるべきだと氏子総代や役員に説いた。「まだ仮設住宅もできておらず、避難者のストレスは最高潮。せめて楽しんでもらえれば」。反対意見はなかった。被災した芸能団体の中には八幡大神楽と八幡鹿舞、八木節が出演要請に応じた。

誰かが実現できると思っていなかった震災の年の山田祭りは9月17、18両日、八幡宮境内などで盛大に行われた。八幡宮と大杉神社の神輿は修復のため繰り出せなかったが、色とりどりの大漁旗が張り巡らされた

境内に芸能団体が集結。盛岡のさんさ踊りや北上の鬼剣舞、諏訪大社（長野県諏訪市）の祭り太鼓など内陸や県外の郷土芸能が応援に駆け付けた。大きく被災し、7月の関口神社の例大祭への出演を見合わせた境田虎舞の一行も列に加わった。

声飛び交う。武藤さんによると、大正期以降に全国的に流行した八木節は、大神楽と同じく戦後10年ほどを経て山田で盛んになった。「愛宕」と呼びならわされる曹洞宗龍昌寺周辺の寺小路や後楽町などの地域で、祖父や父の代から受け継がれてきた節回しを録音して流し、若者たちが番傘や花笠をくるくる回しながらリズムカルに踊る。

山田の精霊がシカの姿になり代わり、祖霊の供養や豊年満作を祈念して踊るとされる八幡鹿舞。被り物の鹿頭は山田八幡宮に納められていて被災を免れたが、八幡町の宿にあって太鼓や笛、衣装が焼失した。関係者が所有する倉庫に、鹿の胴体になる古びた幕が3枚だけ残っていた。鹿舞の装束で目を引く、たてがみのような「カンナガラ」も同じく倉庫にあった角材から削り出して作り、

「進学や就職で」町外に出て行ってしまいう高校3年生のメンバーから、『虎舞をやりたい』という声が上がったので決断しました。1回休むと2年間のブランクができてしまうことも大きかった。当時、山田境田虎舞保存会長だった甲斐谷芳一さん（55）が参加のいきさつを振り返る。津波で境田町にあった2階建ての宿が流され、格納されていた山車は大破。張子の虎頭や五つほどあった太鼓の革も潮水をかぶって使えなくなりました。踊り手として将来を嘱望されていた20代前半の男性と高齢のOBら5人の仲間が亡くなった。

祖父吉夫さんが昭和30年代前半（1955〜60年）に宿を再興した。関口神社の例大祭では、八幡宮に保管してあった古い獅子頭に新しい胴体の幕を縫い付けて踊り、急ごしらえの山車を引いて練り歩いた。太鼓は盛岡の太鼓店から借りてきた。「ハー、アーアア、アー……」。愛宕青年会八木節の代表武藤勝彦さん（47）は、新調したスピーカーから歌が流れ出した途端、感動で身震いした。「スルメも大漁、サンマも大漁！」。漁師町の八木節らしい掛け

震災から2カ月後の5月5日、佐藤宮司は八幡宮境内で子供向けのイベントを開く。東京の大手企業の支援で、つぎたての餅や焼きそばを振る舞い、おもちゃとお菓子の詰め合わせ2千セットを配り切った。手ごたえを感じた佐藤宮司は、東京・浅

太鼓と囃子に合わせて獅子がい、厄を払う八幡大神楽は、八幡町



愛宕青年会八木節は屋台を新たに作り、若さあふれる踊りを披露した（平成23年9月17日撮影）



山田独自の八木節を受け継ぐ愛宕青年会八木節の武藤勝彦代表



震災の年の山田祭りで奉納された八幡大神楽（平成23年9月18日撮影）。獅子頭が焼失し、古い物で代用した



八幡大神楽保存会長の佐藤吉孝さんは津波が原因の火災で「宿」が全焼した

の拠点・倉庫の「宿」に火災が及び、獅子頭三つと太鼓五つ、装束など全てが焼けた。同神楽保存会長の佐藤吉孝さん（54）は消防団第7分団員で懸命に町の消火活動に当たったが、あまりの火の激しさに水源はすぐ尽きた。宿だけでなく、隣接する自宅も失った。

八幡大神楽は明治19（1886）年の文献にある、同年の八幡宮と大杉神社の祭礼で奉納されたとの記述が初見。大津波や戦争を経てたびたび中断したとみられるが、佐藤さんの



暴れる虎を見事に仕留めた境田虎舞の和藤内（平成23年9月18日撮影）。虎頭は保存会員が手作りで新調した



「つらいときに人がすぎるのは神仏や芸能」と語る山田境田虎舞保存会の甲斐谷芳一前会長

てた。太鼓は修理に出し、汚れた衣装は洗濯して祭りに備えた。

最後は神仏と芸能

宮古市から南の三陸沿岸に伝わる虎舞は、近松門左衛門の人形浄瑠璃「国姓爺合戦」で、中国人を父、日本人を母に持つ和藤内（国姓爺）が虎を退治する一幕がモチーフ。甲斐谷さんによると、三陸の虎舞の発祥地は山田町大沢、あるいは大植町吉里吉里で、吉里吉里が拠点の江戸前期の豪商・前川善兵衛（1637〜

1709）が西日本に廻船した際、乗り子（乗組員）だった大沢の民衆らが演技を見聞して伝えたとの説がある。

境田虎舞は明治の終わりごろ、境田地区の7、8軒の世帯が虎舞の盛んだった釜石で習得してきたという。2人で操る虎がやぐらの上を暴れ回り、烏帽子をかぶり、眉毛とひげを強調した化粧の和藤内が伊勢神宮の御札を手に勇壮な動きで虎を追いかける。

「商売繁盛、ますます大繁盛」「境

田虎舞、跳ね虎舞、一杯飲まねば気がすまねえ」。祭りの日、約20人で演じた虎舞で和藤内が虎を仕留めると、お囃子が鳴り響き、いつも通りの掛け声が飛んだ。甲斐谷さんの胸に思いがよぎる。「物質的な復旧・復興は行政や国がやるべきものですが、心や気持ちの部分でそれができないのはひしひしと分かるんです。最後に人がすぎるのは神様、仏様、昔からの芸能なんだなって思ったのが今回の震災なんですよ」

両親と妻子が津波で…

修復を終えた大杉神社の神輿は平成26（2014）年9月15日、震災から3年半を経た山田祭り、前年に北浜町から柳沢地区の山上に遷座した新しい社殿から発進した。同神社の神輿は担ぎ手もろとも海に入る「お塩垢離」の後、漁船に搭載されて山田湾内を巡る「海上渡御」を行うのが大きな特徴だ。

神輿が北浜町の船着き場に差し掛かる。4年ぶりのお塩垢離に、頭を垂れて柏手を打つ同町の人たち。「みんな泣いてるんだよ、やっと帰って

来たって。すげえよ、あれはね」。大杉神社神輿会長の上林善博さん（40）が興奮気味に回想する。

上林さんはしかし、徐々に神輿の重さを肩に感じ、足先をさざ波に洗われながら、複雑な心境だった。「何か、憎たらしいつつうんだか、海が」。震災の津波に父Ⅱ当時（62）Ⅱと母Ⅱ同（61）、妻Ⅱ同（35）、次男Ⅱ同（5）Ⅱを一度に奪われた。

あの日、大工の上林さんは宮古市小山田の現場で地震に遭い、山道を回って日没前に町に戻ると、織笠地区細浦の自宅は流されていた。当時中学3年と1年の2人の娘、小学5年の長男はそれぞれ学校にいて無事だった。震災から18日目までに自宅周辺で両親と妻の遺体を自力で捜し出した。だが、今も次男だけ行方がわからない。一家そろって祭り好き。父は神輿と虎舞の熱心な担いで、母と妻も毎年手伝った。

悲しみの中、会長就任

もう神輿を担ぐのはやめようと思っていた。悲しみのどん底にいた上

林さんに転機が訪れたのは震災1年後のことだ。仲間が声を掛けた。「これから宮司のとき神輿を直させてけるってお願いに行く。（亡くなった）父さんの代わりに来（来い）」。

佐藤宮司は神輿復興のための団体を新たに立ち上げるよう提案。大杉神社神輿会が発足し、仲間の推挙もあって上林さんが会長に就いた。

山田八幡宮の神輿は震災翌年の山田祭り復活した。この神輿は胴の幅が4尺2寸（約1・27メートル）と大きく、荘厳さと重厚さが見る者を圧倒する。90人で交代に担がなければ、体力が持たないほどだ。山田八幡宮神輿会顧問の湊朝夫さん（55）も、震災1年で神輿を出すことに葛藤があった。しかし「（震災で）亡くなった、祭りに関わっていた人たちのためにもやんなきゃない。祭りはつなげていかなきゃいけないものだから、止まってるわけにはいかない」と乗り越えた。

同神輿会は平成12（2000）年ごろに舎人（担ぎ手）の減少を食い止めようと結成。現在、町内外に約100人の会員がいる。若手の養成に

力を入れ、高校生には優先的に担がせる。「将来、神輿を車に乗せて引き回すようなことになったらまずい。今は人をつくる時期なんだ」と湊さんは表情を引き締める。

若者に継いでほしい

芸能団体も後継者不足の解消は喫緊の課題だ。鹿舞の伊藤さんは「震災後、人がどんどん減っています。俺も50歳になって踊るとは思っていない。俺も50歳になって踊るとは思っていない」と心配する。

特に芸能団体の地盤である八幡町や境田町など町の中心部は津波と火災で壊滅し、コミュニティが仮設住宅などに分散。将来の担い手の小中高生らが練習に集まりづらい状況が続いている。大神楽の佐藤さんも「外に出た若者が地元に戻っても「若者が地元に戻っても「若者が地元に戻っても「若者が地元に戻っても」と言っている」と言う。そのためには魅力ある町づくりや大幅な雇用の創出が必要だ。



震災の翌年、2年ぶりに繰り出した山田八幡宮の神輿がお宮に戻る「還御」（平成24年9月16日撮影）。祭りのクライマックスだ



「震災後、神輿を担ぐことに迷いがあった」と口をそろえる湊朝夫さん（右）と上林善博さん

が最後だと思ってるつけえ、ちょっとがんばろうかなって」と朗らかに笑う。

取材時期Ⅱ平成28年6月（佐藤明徳さん）、同7月（佐藤吉孝さん・武藤さん・伊藤さん・甲斐谷さん・上林さん・湊さん）



災害公営住宅や商業施設の整備が進むJR山田線陸中山田駅（休止中）の周辺（平成28年10月26日撮影）。左側の白い壁は新しい防潮堤。新しい町ができてゆく

山田町と「新しい町」

立ち上がる町に捧げる歌

町民と東京の音楽家ら セッションに心通わせ

「町ができる 町ができる 新しい町ができる 傷つき 息絶えた大地の上に 新しい町ができる」

平成27（2015）年11月の夜、山田町の中心街に立つ居酒屋の仮設店舗に、復興を願う若者たちの歌声が響き渡った。東京在住のシンガー伊東妙子さんらのライブコンサート。アンコールで演奏する楽曲「新しい町」に、町の吹奏楽団のブラスやアマチュアバンドの生ギターが絡み、観客たちの合唱が重なる。秋冷の外気を隔てた40平方メートルほどの店内は人いきれでむせ返り、誰もが火照った顔に温かく、幸せそうな笑みを浮かべていた。「ばんざーい、ばんざーい」。セッションが終わると、みんなは快哉を叫んで両手を高く振り上げた。

平成26年10月、山田町で初のライブに臨むT字路sの伊東妙子さん（右）と篠田智仁さん



基調とした楽曲の演奏活動を続けている。

戦乱の国に思いはせ

下田さんによると、「新しい町」の歌詞は東日本大震災が発生する以前の平成19（2007）年にはほぼ完成していた。当時、新聞やテレビで、ボスニアやカンボジアの内戦の後遺症とか、アフガニスタンなどの戦乱に関する報道に接したのがきっかけだった。

「町はがれきに埋もれてるんだけど、逃げ出さずに暮らしている人が

「新しい町」は、ギター、ボーカルの「タエちゃん」こと伊東さんとベース奏者篠田智仁さんのデュオ、T字路s（ていじろす）のアルバム「これさえあれば」（2013年）に、戦前の米国の女性ブルース歌手ベッシー・スミスのカバー曲などと共に収録されている。オリジナルは東京を拠点とするカンザスシティバンドの代表曲だ。

T字路sはその1年前、同じ居酒屋でライブを開いていた。T字路sのサウンドにほれ込んだ、昔のロックや黒人音楽を愛好する店主佐藤澤一彦さん（46）が招いた。

重なる歌詞と町の風景

ざらついた感触のギターとベース

の音色に、しゃがれ声の激しいシャウトが乗る。生で聴くタエちゃんの歌声と篠田さんのベースの振動は圧倒的な音圧だ。ソウルで、ブルースで、ロックで、心の底のよどみを全て吐き出すかのようなパフォーマンス。「新しい町」の歌詞が描く情景と、心の中にあったり、日ごろ目にしたりする山田町のたたずまいが重なる。あの晩、会場に居合わせた、津波にのまれ、その後の火災で焼け野原になったこの町に暮らす人々が、きつと同じ思いだったに違いない。

タエちゃんは震災翌年の平成24（2012）年1月に「新しい町」に出合った。新年のロックイベントの楽屋裏で、出演者の「夜のストレンジャーズ」のギター、ボーカルの三

浦雅也さんが手招いた。「きのう、すごい曲を知ったんだよ。タエちゃんも歌ったらしいよ」。三浦さんは興奮気味に言い、薄暗い廊下でギターを弾き語りして、歌詞とコード進行をメモしてくれた。

三浦さんはその前日に、パンダの着ぐるみでプレイする愛称「ギターパンダ」の山川のりをさんが歌う「新しい町」を聴いて触発された。山川さんにこの曲を直接伝えたのが、作詞・作曲したカンザスシティバンドのリーダー、下田卓さん（ボーカル、トランペット）本人だ。ブラスやリズム隊、ピアノで構成する5人組の同バンドは平成9（1997）年の結成。ブルースやスイング、ジャズなど米国中南部の戦前の黒人音楽を

いて、これからお店を再開するんだって言ったりね。日本でも原爆が落とされた広島や、空襲で何にもなくなった東京の状況は、僕の父母の世代は経験している。どん底からはい上がってここまで来たっていうようなことを考えているうちに、あの詞ができました」

しかし、どうしてもメロディーが決まらない。米国の黒人女性シンガーでギタリストのシスターロゼッタ



「新しい町」を作词・作曲したカンザスシティバンドの下田卓さん(左)と同曲をカバーするT字路sの伊東妙子さん

サーブ(1921〜73)と、ジャズのラッキーミリンダー楽団による戦前の録音のようなゴスペル調の曲にしたいという構想があった。が、一向にまとまらず、時間だけが過ぎていった。

震災経て浮かんだ旋律

そして、4年後の平成23(2011)年3月11日。パソコンの中で塩漬けになっていた歌詞がリアルな輪郭を伴って、下田さんの前に立ち上がってきた。「津波の映像を見ると、町が目の前でどんどんなくなっていく。そういえば『新しい町』は、町を復興しようっていう歌だなんて」。



「新しい町」セッションを実現させた佐藤澤一彦さん。この曲を被災地に広めたいという

かと言って、これをどうしても世に出さねばという気負いや使命感は特になかった。「なんとなく、やってみたら」かつての構想通りの雰囲気を持つ旋律ができた。

その年の初演では、当時蔓延していた過剰な自粛ムードに疑問を感じた反面、「このタイミングで東京の人間がやるのは、ちよつとあざといかなとか、どうなのかなという気持ちもあった」。

新曲「新しい町」は、そんな下田さんの懸念をよそに、じわじわとポピュラリティーを獲得していく。前述のバンドのほか、有名無名を問わず多くのミュージシャンがカバーし、阪神・淡路大震災にインスパイアされた楽曲「満月の夕」で知られるソウル・フラワー・ユニオンの中川敬さんも平成27(2015)年発表のソロアルバムで取り上げた。

平成24(2012)年初め、大阪のFM曲の番組に出演してスタジオライブで披露すると、曲にほれ込んだディスクジョッキーは1カ月間におたつてほぼ毎日かけてくれた。平成7(1995)年に激甚な震災を経験

した関西の人々は、深い共感と共に受け入れたことだろう。

「応援歌」でなく

歌が広まった理由を「歌詞に戦争とか震災の言葉は一つも出てこなくて、聴く人がそれぞれに解釈できる。音楽的にはコードや構造がシンプルで、アレンジが自由に効く」と下田さんは自己分析する。岡山県和気町で棚田再生プロジェクトのテーマソングになったり、労働者の町、東京・山谷のシャッター商店街で歌われたりしたこともある。

歌詞はただ、どこも特定されていない荒廃した町が、東西南北から集まった人々の手によってよみがえる過程を「昔話みたいなストーリーテリング」で淡々とたどる。声高に「がんばれ」とか「絆」とか連呼するような応援歌とは一線を画す。

平成26(2014)年10月、T字路sのタエちゃんはライブのため、初めて山田町に降り立った。震災から3年半余り。津波と火災でついに町は、本格的なかさ上げ工事に備え、家屋や商店の基礎がごとごとく撤去

されて地表がむき出しになっていった。荒涼とした町を吹き抜ける秋風は、潮と砂ぼこりの入り混じったようなにおいがした。「どれだけ大変なことがあったんだらうかって、言葉が失いましたね」

沿岸住民に聴いてほしい

タエちゃんも、以前の下田さんのように「東京に住む自分がこの曲を歌ってもいいのか、どう思われるのかという不安があった」。しかし、それは全くの杞憂(きゆう)だった。「あの歌が聴けてよかった、本当にいい曲だつてたくさんの方に言っていたいで、すごくうれしかったです」

T字路sが去った後、居酒屋店主の佐藤澤さんは「新しい町」を山田町のみんなで演奏したら面白いんじゃないかと考えていた。震災の1年前、当時住んでいた盛岡市で初めて彼らのライブを観た。「頭で聴くというより、体ごと持って行かれる感じ」に衝撃を受けた。震災の翌年に盛岡を再訪したT字路sの「新しい町」の演奏に心を打たれ、「ぜひ沿岸の人たちに聴いてほしい」と平成26年秋に山田に呼んだのだ。佐藤澤さんは津波で織笠地区跡浜の実家が半壊した。盛岡から自家用車で閉伊川に架かる花輪橋(宮古市)の付近まで来た後、古里を目指して

歩いた。4時間ほどして大沢地区川向の辺りまで来ると、がれきに埋もれた町が見えた。あ然として「悲しいとか何とかいうより、無心に近かった」。実家は2階までがれきが入り込み、高校生のころから集めてきた昔のリズム&ブルースやロックなど、アナログのレコード1万枚が台無しになった。生まれ故郷で父親と2人で暮らしていくために、東京や盛岡の飲食店で働いた経験を生かし、更地になった町中でプレハブの居酒屋を開店したのが震災翌年の暮れのことだ。

高揚感あふれる共演

開店から3年を迎える平成27(2015)年、佐藤澤さんはタエちゃんや町の演奏家らに、一緒に「新しい町」をやるかと持ちかけた。11月19日夜。フロアには再訪を果たしたタエちゃんと、古いジャマイカ音楽やソウルなどに影響を受けた東京のシンガー、モッチェ永井さんを囲んで、トロンボーンとトランペット、

新しい町

作词・作曲 下田卓

※町ができる 町ができる
新しい町ができる
傷つき息絶えた大地の上に
新しい町ができる

晴れた日には 瓦礫(がれき)を片付け
雨降る夜には 酒で温まり
希望と絶望を 繰り返し
新しい暮らしが 始まる

東から来た男が 土を耕し
南から来た女が 苗を植える
西から来た男が 火を熾(も)し
北から来た女が 飯を炊く

※繰り返し

やがて川には 橋が架かり
やがて家が建ち 道ができ
やがてこの町で 初めての
新しい命が 生まれる

町の中心に 墓(かぶ)ができる
古い時代の 記憶を刻み
戒めと祈りが こめられた
誓いの墓ができる

※繰り返し

朝日が昇る 陽が昇る
新しい町に陽が昇る
絶望の底から 立ち上がった
この町に陽が昇る



伊東さんが初めて山田町を訪れた平成26年10月の中心街(記事冒頭の写真とほぼ同じ方角から撮影)。荒涼とした景色の中、仮設店舗棟が立つ

ユーフォニアムの三つの金管、アコースティックギター2本のプレイヤーが勢ぞろいした。それぞれがソロを取り、高揚感と充実感にあふれる演奏を繰り広げた。

町側のメンバーはカラオケボックスで2回ほど練習しただけ。当日は直前に夕エちゃんがソロの順番を確



「音楽は人を元気にできる」と語る
トロンボーンのア部基さん



ギターの野田権右さんは「やってみたいの精神さえあれば」と前を向く

て、平成26(2014)年のライブで経験した「新しい町」は「まさに被災地山田の曲だな」(野田さん)と強く思わせるのに十分だった。

「死んだ町」を忘れない

歌の中盤にこんな一節がある。
〈町の中心に 墓ができる 古い時代の 記憶を刻み 戒めと祈りがこめられた 誓いの墓ができる〉

下田さんはこの「墓」に、広島の大原爆ドームのイメージを重ねた。ドームは「壊れそうになったら補修して、いつでも一番悲惨な状態を保とうとする、まがまがしい」負の遺産だ。「人は忘れてしまうから、目に入ってくる形として残さねば。いずれ町が復興して繁栄しても、実は自分たちの生活している地面の下に昔死んだ町があるっていることを覚えていたい。もう二度と(同じ犠牲を)繰り返さないようにしようっていう戒めになりますよね」と下田さんは言う。

「絶望の底から 立ち上がった この町に陽が昇る」。歌の最後は再生を果たした町に明るい希望を託

認したぐらいで、ほとんどぶっつけ本番だった。地元バンドの一員でギターを担当した野田権右さん(42)は「ギターをやってて、本当によかった。聴いてるみんなも一体になって、あれこそが音楽なんだなって」と振り返る。



平成27年11月、町の演奏家らと「新しい町」をセッションする伊東妙子さん(中央右)とモッチェ永井さん(同左)。会場は熱気に包まれた

す。あえて「立ち上がった」と過去形にしたのは、「あの時は全然駄目だと思ってたけど、俺たち、よくここまで来たよなっていう感じで終わらせたかった」からだ。がれきに埋もれた町で新しい暮らしを始め、新しい命が生まれ、新しい町ができる。被災地に暮らす人たちにとっては、歌の世界の中で来るべき「復興」の日を迎えることができる。

すさんだ心の支えに

まるで映画のハッピーエンドのようだ。山田町をはじめとする東北の被災地、シリア、アフガン、ヒロシマ、ナガサキ……。この歌は、荒廃から立ち上がるうとする、あるいは立ち上がった全ての国や町、路地裏に捧げられたものであるといえる。夕エちゃんは「被災地はもちろん、いろんな理由で町が壊れた人のために歌っていききたい。聴いてくれる人の心に灯がともって、力が湧いたらいいな」と話す。

下田さんはいつか、「新しい町」を各国語に翻訳して歌ってみたいと思っている。「それまで生活してい

(39)は、震災からほぼ半年後、町のアマチュア演奏家らに声を掛け、「山田吹奏楽団」を立ち上げた。「支援の方々に外から元気をもたらった分、地元で、内から元気になっていかねば。音楽は人を元気にできる」。中学、高校と吹奏楽部に在籍したが、社会人になってからは疎遠に。楽団結成で、押し入れの奥で眠っていた楽器を13年ぶりに引っ張り出したという。町の高齢者施設などを慰問する活動を続け、平成27年秋には初の演奏会を中央公民館で開いた。「新しい町」セッションに参加した金管奏者はみな同楽団の所属だ。

崩れ落ちる町を見て

野田さんも、阿部さんも、生まれ育った町が津波の濁流にのみ込まれるのを目撃した。

阿部さんは津波の直後、船越地区長林で経営する理髪店の崖下の海で助けを呼ぶ声を聞きつけ、居合わせた警察官らと山田湾内を漂流していた人々をロープで救出。そのうちの40代の男性1人を自宅に招き入れ、真夜中、一緒に2階から町の中心街

た場所が壊滅して、途方に暮れたり、心がすさんだりした人たちの支えになればうれしい。ルイ・アームストロングがジャズで広めた『聖者の行進』みたいに、どこの誰が作ったのかは知られていなくても、曲だけはみんなが口ずさめるような。そうなったら音楽家冥利に尽きますよね」

あの晩のセッションは、町のみんなを大いに力づけた。「まだ何かやれる。これから、何か次につながるんじゃないか」と佐藤澤さん。野田さんも「失敗してもいい。とりあえず、やってみっぺしっていう精神さ

を眺めると火の海になっていた。「まさに地獄でしたね」。自宅は浸水を免れ「感覚的には被災者じゃなかったから、とにかく誰かを助けなきゃと思った」。開いている商店で菓子や飲み物を買って入るのでは、避難者に配って歩いた。

野田さんはあの日、JR岩手船越駅近くの職場で夜勤を終え、家々が海沿いに張り付くように立つのどかな漁村、大浦地区の自宅に戻っていた。津波で9トン級の船舶が防潮堤を軽く乗り越え、集落はバリバリとすさまじい音を立てて破壊された。地元消防団員として、屋根に取り残された住民を助けたり、けが人の応急処置に当たったりした。

勤め先の高齢者介護施設は全壊。同じ社会福祉法人が営むオーブン直前だった高台の同種施設は無事で、介護が必要な被災者を受け入れる「福祉避難所」の機能を果たし、ケアマネジャーとしてその管理・運営に尽力した。

崩れ落ちる町を目の当たりにし、喪失感にさいなまれながら、それでもこの町で生き続ける2人にとつ

えあれば」という。

阿部さんは、四方から集まった人たちが荒れ野を切り開く様子を描いた「新しい町」の1番の歌詞に思いをはせる。「誰かがじゃなくて、みんなが力を合わせて、一つの町を作る。男も女もそれぞれの分野で、やれることをやっていかないと」

みんなが、「新しい山田町」という歌をうたっている。

取材時期は平成27年12月(伊東さん・下田さん)、28年2月(佐藤澤さん・野田さん・阿部さん)



平成28年9月、カンザスシティバンドとT字路sはそろって山田町を訪れ、町民たちとの共演を果たした。写真はリハーサル風景



カンザスシティバンドのメンバー(東京・浅草のライブハウスで)



龍大さんが少年野球に明け暮れた織笠小のグラウンド。
仮設住宅が立ち、裏山だった所は切り崩されて被災者向けの住宅地になっている

龍大さんは高校を卒業する18歳まで山田町で過ごし、北海道の大学で美術を学んだ後、就職のために盛岡市に移り住んだ。藍染工房で働く傍ら、演奏活動にのめり込み、平成21(2009)年にはプロデビューを果たす。ロックやソウル、ブルース、

海辺への思い募り

レゲエなど、古今の大衆音楽を貪欲に飲み込んだ骨太なスタイルで地道にファンの支持を拡大してきた。内陸の盛岡に暮らして7年が過ぎた平成19年のこと。「なんか『潮っ気』

が足りねえな」。海辺の故郷が無性に懐かしくなり、すでにできていた鼻歌の旋律に詞を付けた。へ子ども森 夏の日 あの海を眺めていた
—— 織笠小学校に通っていたころ、高台にある同小のグラウンドで少年野球の練習に励んだ後、そこから見た暮色に染まる海に思いをはせた。
タイトルであり、歌の中で何度も繰り返されるフレーズ「Bon Voyage」は、フランス語で「よい旅を」を表すお別れのあいさつだ。が、そんな意味より単に語呂の良さが気に入って使った。この歌はもともと、都市生活に倦んだ自分が素に戻るために作った。「大した曲じゃなかった」。その価値をがらりと変えたのが東日本大震災の大津波だった。曲ができてから4年の月日が流れていた。
あの日、龍大さんは盛岡市内の自宅にいた。激しい揺れに驚いて外に飛び出すと、電信柱がしなり、家の窓が割れるかと思うほどたわんだ。ほぼ30分後、向かいの住人の車のテレビは釜石の町に容赦なく押し寄せ津波を映し出していた。

震災に打ちのめされ

1週間後にやっと手に入れたガソリンを給油した車で、仙台から駆け付けた兄と国道106号をひた走り、山田へ向かった。「今後、もし父さんと母さんに何かあったら、自分が働くしかない」。道々、不安に駆られ、音楽をやめてしまおうと観念した。さらに町に着いて目の当たりにしたのがれきの山と焼野原の光景が、龍大さんを激しく打ちのめした。海岸から100メートルほどしか離れていない木造の自宅と美容室は、跡形もなく流されていた。敷地内の地下水だけが以前と変わらずちよるちよると湧き出していて、よう



平成28年7月、山田漁港で行われた野外音楽フェス「ウミネコJAM」で熱唱する佐々木龍大さん

Bon Voyage

ふるさとを恋うる歌

悲しみ癒やす「薬」に

織笠出身の ミュージシャン 佐々木龍大さん

ふるさとを恋うって作った歌は、4年後の震災を経て、傷ついた人たちに施す「薬」になった。大津波で織笠地区跡浜の実家が流されたロックミュージシャン、佐々木龍大さん(39)は盛岡市在住が作詞・作曲した「Bon Voyage」。子守唄とか童謡みたいなメロディーに、少年の日の夕暮れ、友達と肩を組みながらたどった家路の情景を重ねる。震災のショックから「もう音楽はやめよう」とまで思い詰めた龍大さんだが、この曲の持つ癒やし力の力にあらためて気づき、歌い続ける人生を選んだ。



龍大さんの生家に近い織笠大橋から眺めた山田湾の風景。大島と小島が並んで浮かび、右手に湾口が見える



佐々木龍大(ささきりゅうた)さん

昭和51(1976)年、山田町織笠生まれ。織笠小学校、山田中学校、県立山田高校を経て、道都大学(北海道北広島市)を卒業。同大美術学部でシルクスクリーンを学ぶ。平成21(2009)年にバンド「RYUDEN」としてCDデビューし、バンド名義のほか、これまでに2枚のソロアルバムを発表。音楽的なルーツは、美容師の母よね子さん(69)がいつも職場でかけていた有線放送のビートルズ。ジャズギタリストの父克彦さん(72)の背中を見て、中学1年でギターを始め、高校時代にはレゲエのポップ・マーリーに傾倒した。その後、英国のブルースロックやサイケデリックサウンドなどに影響を受ける。18歳の時に初めて作った曲はレゲエ調の反戦歌だったという。現在は盛岡を拠点にライブ活動を行い、染色家の横顔も持つ。

Bon Voyage

詩・曲 佐々木龍大

Bon Voyage 遠い帰り道
いつまでも手を振っていた
あのぼうやもう帰りなさい
君の事見守ってるよ
Bon Voyage
子どもの森 夏の日
あの海を眺めていた
おいてけぼりの貝殻
なぜか今捨ってるよ
ほどけそうな指
きら星 あしなが星
届きそうな指
つなごう つなごうよ
Bon Voyage
君はもう明日の
夢を見てねむるんだよ
また今夜遠い空から
いつまでも見守ってるよ
Bon Voyage
バイバイ Bon Voyage
バイバイ Bon Voyage

町の子らの声響く日まで

「帰り道」をたどったり、「海を眺めて」いたりする子供の視点。もう一つは、その子供を「遠い空からいつまでも見守ってる」何か大きな存在のそれだ。龍大さんは、震災前はもっぱらふるさとを懐かしむ「子供視点」で歌っていたが、今は後者の「星視点」になっているという。

は心の薬になる」

震災から1カ月後に岩手県公会堂(盛岡市)で開かれたチャリティーライブで音楽活動を再開したが、まだ「心身共にぼろぼろだった」。それでも、四十八坂海岸から眺めた船越の豊饒な海をイメージした新曲を初めて披露すると評判を呼び、次第に、震災前より活動に「ピントが合った」感じがしてきた。

ある時、「Bon Voyage」を演奏していると、自分の中で「歌う視点が全く変わって」いることに気づいた。この歌には二つの視点が出てくる。一つは夕暮れ時に「遠い

やく自分の立っている場所がどこだか分かった。「知っているものが全部行ってしまった」

再会した両親に車中で抱いた思いを打ち明けた。「いや、やめたからって何も解決しないよ」。2人から返ってきた言葉にこもる意志の強さに後押しされ、「そこから音楽で何ができるのかを探り出した」。両親が身を寄せる親戚の「おばちゃん」の家で、ラジオから童謡「赤とんぼ」が流れてきたのはその時だった。

重なる「赤とんぼ」

へ夕焼 小焼の 赤とんぼ 負わ

れて見たのは いつの日か——詩人の三木露風(1889〜1964)が、幼いころに子守娘の背中のぬくもりを感じながら過ごした古里の記憶をおぼろげにたどる。日本人なら誰しも郷愁を誘われる詞と旋律だ。そして、母親が歌い聴かせてくれた子守唄。

これらと、自作の「Bon Voyage」がもろに重なった。被災地にやたらと「元気」を押し付ける「復興ソング」への反発心もあり、こう確信した。「みんなが悲しかったり、不安だったりするときに聴いて、気持ちを温めてほしい。この曲

「子供って、別れるとき、ずっと遠くに離れてもいつまでもバイバイって手を振ってるでしょう。そういう声があふれると、町がすごく平和で幸せな感じがします。そんな日常が早く戻ってほしい」

この、海辺の桃源郷のような小さくても豊かな町に生まれ育ち、震災によるとてもない喪失感を経験した龍大さんの、切なる願いだ。

(平成28年7月11日取材)

第1章 残す

震災の概要と被害状況

震災の概要

津波の被害状況（地区別）

岩 船 昌 起

（鹿児島大学総合教育機構共通教育センター教授・防災担当）

田 村 俊 和

（東北大学名誉教授）

〈調査会社提供のデータを基に解説〉

第3章 伝える

津波の来襲と避難

やって来た津波と襲われた土地

田 村 俊 和

瀬 戸 真 之

（福島大学つくしまふくしま未来支援センター特任准教授）

土地の特徴と避難行動

岩 船 昌 起

田 村 俊 和

瀬 戸 真 之

山田町の避難生活

阿 部 隆

（宮城学院女子大学名誉教授、日本女子大学名誉教授）

避難者は何を食べていたか

白 尾 美 佳

（実践女子大学生活科学部食生活科学科教授）

水 野 い ず み

（実践女子大学生活科学部生活文化学科准教授）

岩 船 昌 起

総合考察

岩 船 昌 起

田 村 俊 和

写真提供（敬称略）

黒 沢 一 成（7 頁上・8 頁右下・11 頁右下・19 頁上・28 頁中・29 頁下・31 頁上・78 頁・96 頁・102 頁・105 頁下・236 頁下）

福 士 美 保 子（17 頁上・40 頁下）

橋 浦 恒 一（18 頁左上・18 頁下・19 頁左下・19 頁右下・91 頁上）

自 衛 隊（24 頁上・76 頁・114 頁）

野 田 義 則（31 頁中）

野 田 和 子（31 頁右下）

山田町観光協会（58 頁上・58 頁中）

一般社団法人家の光協会（246 頁）

DubMaster DC（263 頁下・268 頁）

カンザスシティバンド（267 頁下）

本記録誌の製作に当たっては、多くの町民の方々が取材や各種調査に応え、震災体験に関する貴重な証言を寄せてくださいました。

第2章「語る」では、あの日、町内各地区で何があったのかを克明にたどり、古老の方々には過去の大津波の記憶と教訓を丁寧になぞっていただきました。

また、第3章「伝える」の「津波の来襲と避難」の聞き取り調査では、各地区当たり数人の方が避難行動の詳細を教えてくださいました。

今回お話を伺うことができなかった町民一人一人の体験も「東日本大震災」の貴重な教訓となります。避難経路や地点ごとの時刻、その時に発した言葉、何を思ったかなど、具体的な行動ができる限り正確に記述されていれば、未来世代や他地域の人々が津波から身を守る際に役立つ資料となります。ぜひ記録を残し、いずれご教示くだされば幸いです。

さらに、第4章「支える」、第5章「興す」でも、内外で当町を応援してくださる方々の声を頂戴することができました。

ここに、協力していただいた全ての方々から感謝申し上げます。誌面ではその全てを掲載できませんでしたが、貴重な記録・教訓として長く後世にとどめ、今後の町の防災だけでなく、人づくり・地域づくりにもしっかりと生かしたいと存じます。

最後に、震災から現在まで、当町をご支援くださった国内外の全ての方々、団体・機関に対し、あつく御礼申し上げます。



震災の年に山田インター付近の国道45号沿いに北浜地区有志が立てた、
全国への感謝の気持ちを表す看板（平成23年8月17日撮影）

3・11 残し、語り、伝える 岩手県山田町東日本大震災の記録

平成29年5月1日発行

【編集・発行】

岩手県山田町

〒028-1392 岩手県下閉伊郡山田町八幡町3-20

電話 0193-82-3111

FAX 0193-82-4989

<http://www.town.yamada.iwate.jp/>

【印刷・製本】

株式会社東海印刷所

●裏表紙上の写真

子供たちの明るい笑顔が未来への希望をつないでくれる
(平成23年4月17日、大浦地区で撮影) = 自衛隊提供



3・11 残し、語り、伝える
岩手県山田町東日本大震災の記録



岩手県山田町